子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2009年9月　NO.151

「街の塔」　大野洋平

〈もくじ〉

夢は諦めなければ必ず実現する …… 中澤清一　2
長宗我部元親・信親父子と島津家久 …… 新名一仁　3
「佐川・酒蔵ロード劇場」への道、からの道。 …… 酒井敦美　4～5
出会いの海へ・一冊の本をめぐって② …… 前田由紀枝　6～7
アメリカの教育　―オバマ大統領誕生で考えたこと …… 可知文恵　8～9
言葉の現場から17　国語ってインチキ？「主観的読み」と「客観的読み」 …… 広井　護　10～11
高知のギャラリー⑬　ギャラリー　クンスト プラッツ …… 河合妙子　12
高知市文化振興事業団　7月～8月の事業から …… 13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

夢は諦めなければ必ず実現する

すべての大人が夢を語ろう！

中澤清一

少し前の高知新聞夕刊の広末記者のコラムで読んだ、ある中学校の修学旅行の話。

担任の先生が保護者に相談し、生徒たちには内緒で旅行前に「子供への手紙」を書いてもらっていた。手紙はホテルでの夕食時に生徒に手渡された。

子供たちは「えっ？何で？？」。まさか遠く離れた沖縄で、家族の心に触れるとは思っていなかった。みるみる涙ぐむ子、そっと席を立ち、廊下で読む子…。誰一人、その手紙や演出を「ちゃかす」子はいなかったらしい。

少しの間教育行政に携わった者としては、この話は驚きであった。

学校内での教職員の調整、そして保護者一人ひとりに対するお願いのご苦労など。様々な意見が出ただろうし、リスクも感じただろう。よくやめてしまわなかったな～と、先生の勇気と行動力に大袈裟だが尊敬の念を抱いた。

話は変わるが、県の教育長表彰（「高知県児童生徒表彰」）の推薦募集が年に二回ある。スポーツやコンクールなど、様々な分野で活躍した生徒を表彰する制度である。

この中で「その他の部」という部門があり、目に見える成績や成果以外に先生方が自由に推薦できるのだが、過去八回でエントリーが一度もなかった。

これは、新たな評価の基準を見つけることができていないのか、提案してもどうせ採用してくれないという諦めか。審査する側も、突拍子もない内容をエントリーしてこられても、採用する勇気もいる。私の思いすごしかもしれないが、全く盛り上がっていないのである。

今、先生方にとって、いろんな事に挑戦するにはあまりにも外圧が多すぎる環境だと感じている。

そこで、私たち経営者が、具体的に学校の先生を支援する仕組みはないかと考えた。

そのひとつとして、今年十月二十九日、かるぽーと大ホールにて、土佐経済同友会主催で「２００９ドリームプラン in 土佐」を開催することにした。人材育成、組織や地域の活性化などに長年携わり、日本中の多くの方から「メンター」と慕われている福島正伸先生を講師に、対象を学校の先生方をメインにしたセミナーである。

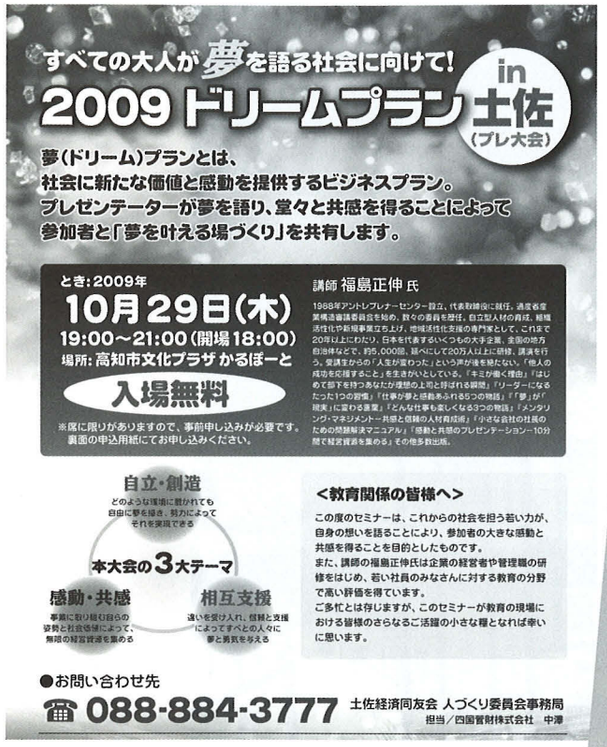
二年前から東京で行われている「ドリームプラン全国大会」の入賞者を招き、彼らがなぜ夢を諦めず、どうやって夢が実現していったか、参加者とともにプロセスを検証していく。教育関係者だけでなく一般の方も歓迎しているので、みなさんもぜひともご参加ください。

そして来年からは、土佐独自の「ドリームプラン」を開催していきたいと決めている。

「夢は諦めなければ必ず実現する」ということを知ってもらいたい。そして、先生や私たち大人が堂々と夢を語れる、そんな社会にしたいと思っている。

感謝

（なかざわせいいち／四国管財株式会社お客様係&代表取締役社長）



長宗我部元親・信親父子と島津家久

新名一仁

宮崎県宮崎市にあります宮崎市佐土原歴史資料館では、今年十月三日（土）から十一月二十九日（日）まで、「島津家久・豊久父子と佐土原」と題する特別企画展を開催いたします。

島津家久と聞いても、高知の皆様にはあまりなじみのない名前かと思いますが、豊臣秀吉の命をうけて九州に進攻した四国勢を撃ち破り、長宗我部元親の長男信親を死に追いやった武将といえばご存知の方もいらっしゃるのではないでしょうか。

この島津家久は薩摩を本拠地とする戦国大名島津貴久の四男で、兄には九州全土に勢力をのばした義久、関ヶ原合戦の敵中突破で知られる義弘らがいます。彼は島津氏の薩摩・大隅・日向三か国（現在の宮崎・鹿児島両県）統一に軍事面で大きく貢献し、天正七年（一五七九）三十三歳で日向国佐土原城主となって以降も、島津氏の勢力が九州全土へと拡大していく中で、日向衆を率いて次々と軍功をあげていきました。

天正十四年（一五八六）十月、家久は兄義弘と共に大友宗麟の領国である豊後国（大分県）に進攻します。島津・大友両氏の和睦を命じていた関白豊臣秀吉はこの行動に激怒。島津氏征伐を決定し、まず先鋒として四国勢に九州出陣を命じたのです。

家久は、同年十二月、大友氏の本拠地府内（現在の大分市）を攻略すべく、府内から戸次川（現在の大野川）を少しさかのぼった鶴賀城を包囲するに至ります。長宗我部元親・信親、十河存保、仙石秀久ら四国勢（約六千人とも伝えられる）はこれを救援すべく戸次川対岸に出陣し、同月十二日、功を焦る軍監仙石秀久は長宗我部元親らの反対を押して戸次川渡河を敢行、家久率いる島津勢約一万と激突しました。当初、四国勢が押し気味でしたが、島津勢は得意の「釣り野伏（のぶせ）」で敵を包囲し形勢は逆転、乱戦の中で長宗我部信親、十河存保ら大将クラスが戦死するなど四国勢は大敗を喫し、敗走してしまいます。

そして、この戦いの翌年、豊臣秀吉自身が九州に進攻して島津氏は敗戦し、家久も降伏しますが、その直後の六月五日、家久は急死します。一説には毒殺ともいわれています。

九州制圧後、秀吉は失意の長宗我部元親に報いるべく日向一国を与えようとしましたが、元親はこれを辞退しています。実はこれより先の天正十三年（一五八五）八月、元親は島津氏に大船一艘を寄贈しており、日向衆がこれを受け取っています（『上井覚兼日記』）。元親は島津氏との連携を模索していたとも考えられ、秀吉の命令により、心ならずも両将は戦うことになったのかもしれません。

大分県大分市郊外の戸次川古戦場跡付近には、長宗我部信親の墓や十河一族の供養碑などがあります。また、大分市中心部には四国勢が助けようとした大友氏の館跡が近年発見・発掘され、出土品を展示・紹介する施設もできています。また、今回企画展を開催します佐土原歴史資料館の近くには島津家久の墓所もあります。長宗我部元親・信親の戦いを偲んで、大分・宮崎を訪れてみてはいかがでしょうか。

（にいなかずひと／みやざき歴史文化館学芸員）

宮崎市佐土原歴史資料館
宮崎市佐土原町上田島 8202-1　TEL 0985-74-1518
http://www.city.miyazaki.miyazaki.jp/cul/rekisi/

「佐川・酒蔵ロード劇場」への道、からの道。

酒井敦美
写真／小林新治さん

八月一日、雨が気分をそわそわさせる中、「第二回佐川・酒蔵ロード劇場」が、地元の活性化に取り組む「NPO法人 佐川くろがねの会」の主催で行われました。

「佐川・酒蔵ロード劇場」とは、佐川町・司牡丹酒造の酒蔵の白壁が舞台背景に、道が劇場になって、ジャンルを超えたアートの表現の場となる一夜限りの夏祭りです。

愛知県在住の私がこの酒蔵ロード劇場に関わるようになったはじまりは、二年前の初夏の夕暮れでした。

私は徳島県脇町での「光の切り絵展」と題した個展のため、四国に出向いており、ふらり…と佐川まで足を伸ばしたのでした。酒蔵の道の雰囲気に魅かれ、案内の方と歩いていると、通りの一角の歴史のありそうな商家の格子戸がガラガラと開き、ステキな女性が現れました。

格子戸の向こうには、墨の模様が躍る和紙の柱が灯されています。その時、私を包むあらゆる雰囲気に見とれ、思わず立ち止まってしまいました。その女性は、書家・北古味可葉さんでした。この重厚な蔵造りの商家をご自宅兼ギャラリー「スタジオ可葉」とされているのです。

その場でお話を伺え、そのうちに「夕飯のものでも買いに行こうとたまたま出たところだったのよ」と言われます。私はとっさに「私、今日、誕生日で…よかったら一緒にお食事していただけませんか?」とお誘いしていました。

「いいわねー、おいしいお魚でも食べに行きましょうかぁ」店に着くと、かわいいブーケが届けられていて、「お誕生日おめでとう、佐川へようこそ」と、プレゼントしてくださったのです。

食事の席で可葉さんは突然、こう話し出されました。

「この酒蔵の白壁をスクリーンにして映像表現ができないかと考えてるのよ」

思わず、「私、切り絵とOHP（オーバーヘッドプロジェクター）を使ったアナログな影絵を作っていて、仕切りも天井もない屋外での投影、ずっとしてみたかったことなんです…」と、それまでやってきた舞台での影絵の写真を見ていただきました。それが可葉さんとの、そして酒蔵ロード劇場との出会いとなりました。

その時の忘れられない言葉があります。

旅の出発前、父の大動脈瘤が見つかり、命に関わる大きな病気だとわかって、私は失意のうちに四国に来ていたのでした。

それでも、いい誕生日を迎えられたという喜びを可葉さんにお話しすると、可葉さん自身、ご主人とお父様を昨年亡くされたことを話してくださいました。

私が「その後って、創作に向かう気持ちになれましたか?」と尋ねると、「何言ってるの…そこからよ、本当の創作がはじまるのは」と、言われたのです。

それから一年後の夏、「第一回酒蔵ロード劇場」を目前に、父は亡くなりました。

「屋外での影絵、見てみたいなぁ」

そう言いながら父と母が旅の計画を立てていた矢先でした。

告別式を終え、明日四国に向かうという夜、可葉さんのあの言葉を思い出し、今の悲しみと、父のぬくもりと、明日への希望を、「父の手」という小さな作品にすることができました。不思議と気持ちが落ち着いてゆきました。

はじめての酒蔵ロード劇場は、「佐川くろがねの会」のみなさんの笑顔と汗と、会場を訪れたみなさんの歓声と、学校や施設からお借りしたOHPの優しい光が映し出す影絵とで、なんともあたたかく優しい、素朴な夏祭りとなりました。

影絵は白壁をはみ出し、動き出すかのようにも感じられ、見上げれば満天の星です。無限な広がりと開放感とに、気がつけば私は空を仰ぎ、前に歩き出す力をもらっていました。

そしてまた一年がたち、今年八月、二回目の酒蔵ロード劇場が開催されました。

昨年に引き続いてのダンスや土佐琵琶の演奏。新たに、影絵が映る中でのファッションショー、8ミリ映像、音楽、屋台も加わりました。

昨年の様子が新聞や口コミで広がり、県内外からたくさんの方が来てくださいました。

それでも、この酒蔵ロード劇場を支える「佐川くろがねの会」のみなさんは、「佐川町のみなさんに向けての夏祭りにしたい」と、地元を見つめていらっしゃいます。

今回は、雨の中での影絵となり、機械が濡れないようにと直前でのセッティングや軒下への移動、私の確認不足も重なり、思った場所に思ったとおり映すことが難しい状況でした。二時間の投影中、少しでも改善できたらと走り回って、今年の幕は下りました。

「雨だけど開催できてよかった!」「大勢の人が喜んで帰ってくれた」「傘にも影絵が映って、雨ならではの景色もよかった」

そんなあたたかい言葉にも、私自身は残念な気持ちをどこか拭い去れませんでした。

高知を去る前夜、可葉さんのスタジオで、ご近所のみなさんが打ち上げ食事会を開いてくださいました。一つだけ影絵を映しながら、おいしい食事とダンスとで、楽しくて、幸せなひとときでした。

「あつみちゃんの原画が濡れないように、いつでもしまえる大きな袋があるといいね」

「来年は私も影絵のお手伝いするね。絵を出した瞬間、歓声が上がってね、とても気持ちいいのよ」

そして、ポツンと映っている一枚の桜を見ながら、「これが酒井敦美の世界なんだ。たったこれだけでいいんだ。作家はどう絵を見せたいか、表現を大事にするべきだよ」。そんな言葉をくださいました。

映す絵の数を多くすることでみなさんの要望に応えようとして、私はどこかで表現にとって大切なことを後回しにしていたのかもしれない。

イベントをただ大きく広げることではなく、地元の佐川町や、作家の表現を大切に思ってくださる「佐川くろがねの会」のみなさんから、今回もたくさんの喜びと優しさと、大切なものをいただきました。

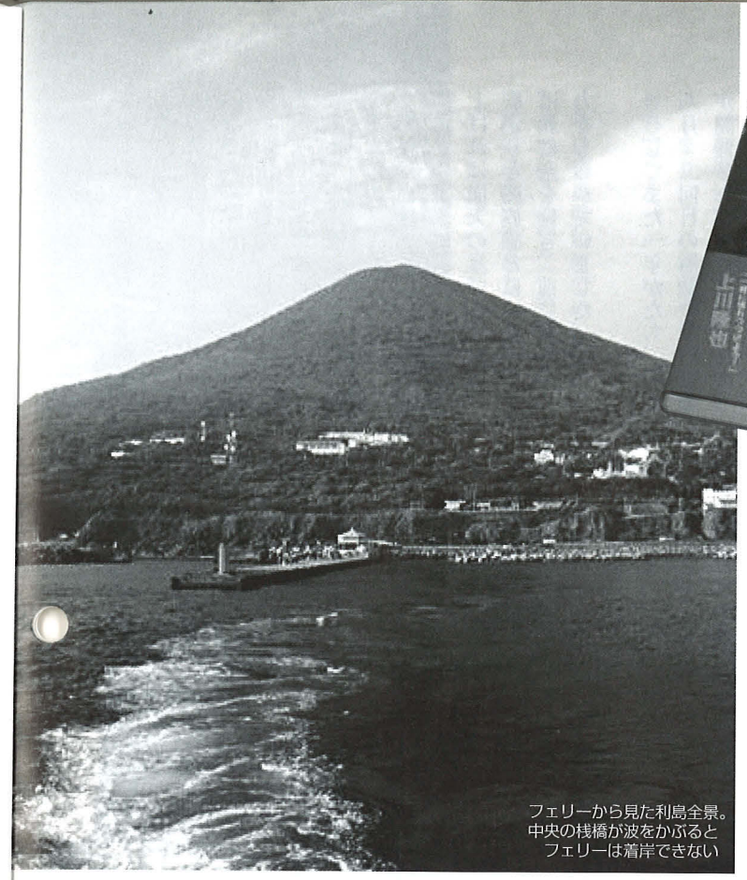
今年もまた一歩、踏み出させてもらった「佐川・酒蔵ロード劇場」です。来年に、思いを馳せながら…。

（さかいあつみ／光の切り絵作家）

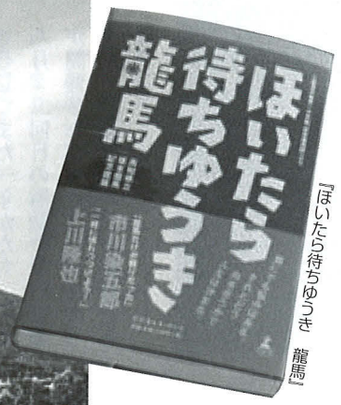
出会いの海へ・一冊の本をめぐって②

行動する龍馬

前田由紀枝



フェリーから見た利島全景。中央の桟橋が波をかぶるとフェリーは着岸できない



『ほいたら待ちゆうき　龍馬』

話は一冊の本に始まる。『ほいたら待ちゆうき　龍馬』（高知県立坂本龍馬記念館編集、幻冬舎ルネッサンス発行）という、高知県立坂本龍馬記念館の「拝啓龍馬殿」に寄せられたメッセージをまとめたものである。開館以来の十六年間に寄せられた一万二千通の中から千五百人の声を収録し、各年に一人の人を選んで私が訪ねて取材した話も載っている。

全国津々浦々、あらゆる世代の人たちからのメッセージからは、さまざまな人生と多くの土地があることが分かるが、取材行を通じてその思いはいっそう強くなり、余韻はいまだ褪めることがない。

その一端をご紹介したいと思う。

「東京のトシマって知っていますか？」。

そう尋ねると、大概の人から「知っていますよ、豊島区よね」「豊島園とか行ったことあるし」という答えが返ってくる。

ところが、「いえ、豊島じゃなく利島ですよ」と言うと皆、怪訝な顔になる。

そのはずである。この利島、いえ、正しくは東京都利島村。ここは東京都民もほとんど知らないという人口三百人、面積四平方キロメートルほどの小さな島だからである。

伊豆諸島のひとつで、東京からはフェリーで八時間。ただしフェリーは必ず着岸できるというわけではない。少しでも天候が悪いと桟橋は波をかぶってしまい、船は近くの大島まで引き返す。島行きを急ぐなら、大島からヘリコプターに乗るのだという。飛行時間十分で約七千円。安くはない。日本にこんなところがあったなんて…。

そんな離島で龍馬は生きていた。

利島中学校の先生・小林幸代さんは、今から六年前の正月、記念館に来て龍馬にこんな思いを綴っている。

『東京の伊豆七島の中の、小さな新島という所から来ました。新島中学校で中学三年の担任をしています。我がクラスはこの一年を「龍馬」をテーマに生活しています。京都の修学旅行では龍馬を勉強し、全員で墓参り。秋の文化祭では、龍馬の劇を学年全員で演じました（「翔べペガサス」という題です）。卒業式では「志を持って足元だけを見ずに。大きく龍馬のように羽ばたきなさい！」とメッセージを贈るつもりです。島に帰ったら子どもたちにみやげ話を聞かせます。「やっぱり龍馬はすごい！」と』。

それから四年後。

『卒業式ではもちろん「何の志も無き所にぐずぐずして日を送るは実に大馬鹿者なり」を生徒たちに私から最後のメッセージとして贈りました。そして、何十年後かのクラス会は高知でやろうネ。と約束をしました。現在私は、新島のすぐ隣の、もっともっと小さな利島という島に赴任しています。今年の中学三年生はたった一人ですが、再び同じメッセージを贈るつもりです』。

島で、「小林先生といえば龍馬」というくらい龍馬通は有名らしい。専門は数学というからこれも面白い。

そんな小林さんに都内で会った。都会的な雰囲気も似合う人だった。

取材に先立って小林さんのメッセージを読んだ私は、彼女は私と同世代の人だなと思った。なぜかは分からないが、子どもたちへのまなざし、まっすぐに人生に向かう姿勢に共感を覚えたからだ。年を聞くとやはり同い年。親近感がわいた。

都内で教師になる夢を叶え、念願の〝島の先生〟になって十年がたつという小林さん。島に来て、大好きな海を見ているだけで幸せだと語る。

龍馬との出会いは、最初に赴任した新島で、新撰組最後の隊長、相馬主計（そうま・かずえ）の碑を見つけたことにあった。主計は明治三年（一八七〇）、龍馬暗殺事件などの取り調べを受けた後、流刑者として新島で二年間暮らしている。

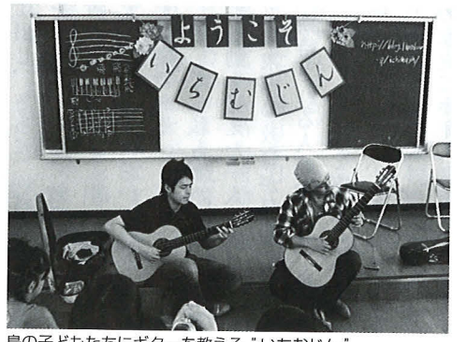
碑を見て、学生時代に読んだ『竜馬がゆく』を読み返したという。再発見したことも多かったのだろう。以来、龍馬を通じて子どもたちに夢と希望を持ってほしいと語り始めたようだ。

小林さんは、龍馬ゆかりの土地を訪ねることももちろん、海外にもよく行くという。近年はアフリカに行くことが多いらしい。取材のあと、高知にも来てくださった。忙しい仕事をやりくりしているのだろうが、気負うところがない。

行動する龍馬と重なる。

小林さんのキャリアは島で確実に根付いている。来年には、記念館が企画しこの十一月に行うイベントである、女優・小林綾子さんが龍馬の手紙を読む朗読コンサートを、利島でも開催してくださることになった。島の子どもたちのための教育普及事業の企画が通ったからである。私も利島に行き、島の子どもたちに龍馬の話をしたり、二人の小林さん（幸代さんと綾子さん）と一緒に授業することを楽しみにしている。

昨年小林さんは、私の教え子であるクラシックギターデュオ〝いちむじん〟のコンサートも島で開催してくれた。自分は龍馬の生まれ変わりだと豪語する山下俊輔や宇高靖人も、演奏会はもちろん、島の子どもたちにギターを教えたり一緒にサッカーをしたりして、人生でも大切な思い出ができたようだ。



島の子どもたちにギターを教える〝いちむじん〟。人生の思い出ができたという

小林さんの熱い思いが島と高知をつないでくれる。

江戸時代の古地図にも利島の記載はある。しかし、地図にあっても、今まで知らなかった、出会うことのなかった土地と人を、龍馬が結びつけてくれた。

小さな離島で暮らす小林さんに今、微塵の迷いもない。翻って私はどうだろう。

「何の志も無き所にぐずぐずして日を送るは実に大馬鹿者なり」。龍馬に一喝された気がした。

――出会いの旅は続く。利島から離れて、次号でもう少しだけお伝えしよう。

（まえだゆきえ／高知県立坂本龍馬記念館）

小林幸代さん（右）と筆者（今年２月、高知市五台山の竹林寺で）

アメリカの教育

――オバマ大統領誕生で考えたこと

可知文恵

アメリカ合衆国に黒人初の大統領が誕生した。彼は世界中の期待を一身に受けている。そして、黒人以外のアメリカ人からも多大なる支持を集めた。これは、一体どういうことなのだろうか?

多くの評論家、メディアが論評をし、彼の人格、知性、指導者としての資質を絶賛している。就任後半年以上経過した今も、その評価は変わらない。

彼の、世界各国を訪問しての外交には目を見張るものがある。訪問国の市民が彼の演説を聞くために大勢集まってくる。アメリカ国民だけでなく、彼の指導力は世界から期待されているようだ。

オバマ外交は国際協調主義を前面に出し、さらに、「核兵器なき世界」を提唱している。被爆国日本を差し置いてと言うか、出し抜いて。軍事大国アメリカにおいては一八〇度の大転換である。

そして、私もオバマ大統領の誕生に感動を覚えた一人である。アメリカ合衆国の教育が目標としている「期待される人間像」を、彼が実現していることを実感したのである。それと言うのも、私は一九九四年から五年ほどの間ネブラスカ州で一般の家庭にホームステイしながら公立学校（幼・小・中・高）で日本文化を教えていたことがあり、その時、アメリカの教育と日本の教育との違い、素晴らしさに気づき、調べてみたからである。その中で私がオバマ氏に感ずるのは、アメリカのエリート教育、歴史教育、また人権教育の成果である。

CNNが伝えたオバマ氏の生い立ちによると、父親の不在、母親の再婚、黒人差別を受けてきた経験など、彼は過酷な人生を送っている。その過酷さ故に麻薬にも手を出した、という告白も彼は演説でしている。しかし、彼はそれにめげず、元来優秀だった学力を生かし、自分の不満を学業に向け実力を向上させていったとのことである。

私が体験した学校教育は、アメリカ中部の州・ネブラスカのいくつかの小さな町の学校の例である。大都市からは離れ、ドラマ「大草原の小さな家」のような牧歌的なところであった。大変保守的な町であり、共和党の強い州でもある。しかしながら、この地方独特なものだけでなく、アメリカ合衆国という国のかなり普遍的な面を持っていることも感じられた。

アメリカでは、小学校からエリート教育、リーダー教育に力を入れており、スピーチクラスもある。優秀な生徒には無償の奨学資金が授与される。私が訪れた高校では卒業生（二百人）の一〇％の成績優秀な生徒に大学進学への無償の奨学資金が与えられた。黒いガウンを着ている卒業生に交じって、彼らは水色のガウンを着ていた。そして、彼らの名前と写真はタウン誌に大きく紹介された。

今ひとつは、歴史教育である。小学校四年生から社会科で教えるアメリカ開拓の歴史におけるフロンティア精神は、アメリカ人の誇りであり、教育の目標でもある。イギリスからの独立戦争にはじまり、リンカーン大統領の奴隷解放政策に由来する南北戦争、そして…。

オバマ氏は演説でアメリカの開拓の歴史、精神、そしてワシントン、リンカーンをはじめとする大統領たちのなしてきた軌跡を辿りながら、アメリカの現在の危機からの脱出を全国民に訴えた。有権者たちはアメリカの歴史や精神をオバマ氏と共有し、彼と共にアメリカの再生を決意したのである。

いまだに残る黒人差別はもとより先住民、移民の問題も根深い。そのために人権教育やマイノリティへの優遇政策にも力を入れている。しかし、それらは全国民に理解されているとは言えない。それ故に誰もがオバマ氏の当選を予測しなかったのである。

アメリカの歴史の最大の汚点は奴隷制度から今に続く黒人差別だろう。アメリカ国民は黒人大統領を選んだことで、一つのハードルを越えたのではないだろうか。

私はアメリカの選挙にも興味を持ち、新聞記事を切り抜いたりして資料集めをした。選挙の投票所へも足を運んだ。大統領選挙は二年以上もかけて選挙運動をする。それが不思議でならなかったが、今回のオバマ氏を見ていて理解できた。

立候補者は国民の前で対立候補者と討論し、国民の審判を受けながら、政党の大統領候補に選ばれていく。政党の大統領候補となったオバマ氏は対立政党・共和党の大統領候補と激論を交わし、各州をまわりながら大観衆の前で演説をして審判を受けた。彼はこの間に次第に大統領としての資質が充実していったように見受けられる。

また、過日来日したクリントン国務長官の人格や言動の中にも、アメリカのエリート教育の真髄をはっきりと見ることができた。

「現代の日本になぜオバマ氏のような知性、感性を備えた指導者が出現しないのかを考えるべきではないのか」。入江昭・米ハーバード大教授はこう述べている。

私は思う。今の日本ではリーダーの育つ土壌はないのではないか。「出る杭は打たれる」式の考え方、「差別化された教育」の否定では、リーダーは育たないと思う。私はアメリカの教育を見て「能力は格差ではなく個性である」と考えるようになった。このように考えれば、一人ひとりを大切にする教育の構築がなされるのではないだろうか。

アメリカではリーダー教育はシステム化されている。町の教育委員会に専門の教員が配置されていて、学校を巡回して指導する。リーダー研修だと言って、時々、各校のリーダーを集めての研修会が開催されている。

他方では、学習遅滞児童、障害児童、英語の話せない移民の子供などを対象とする特別のプログラムを持っている。それらは驚くほど緻密であり、複雑である。

ここまで細かく、個々の子供の能力、個性に合った教育システムを先生方が実践していることに驚いた。またそれを補佐していると言ってもいい子供たちの姿にも私は感動した。

（かちふみえ／元保育所所長・元文化交流員）

言葉の現場から 17

国語ってインチキ？

――「主観的読み」と「客観的読み」

広井　護

中学一年生を対象にした国語の授業を、私は次の問いかけから始めることにしている。

「文学作品の読みは、主観的なものだと思いますか。それとも客観的なものだと思いますか？

たとえば、島崎藤村の『小諸なる古城のほとり　雲白く遊子悲しむ』ではじまる『千曲川旅情の歌』には、誰が読んでもそう読めるという客観的な一つの読み方があるのでしょうか。それとも、十人の人が読めば、十人それぞれが違った読み方をしてもいいのでしょうか。どう思いますか？」

この問いかけに、生徒たちの目は真剣な光をおびる。彼らが国語という教科に対して日頃から抱いている疑問に、この問いが触れるからだと思う。

国語は、生徒たちからあまり好まれない教科である。つかみどころがない。あいまいだ。勉強の仕方がわからない。授業によって、国語の力って本当につくのだろうか…等々、否定的に語られることが多い。なんとなくあやしい教科だと思われているふしもある。

その根底に、読みは主観的なものなのか、客観的なものなのかという疑問に明確な答えが与えられていないということがあるのではないか、と私は考えている。

この問いかけに対する生徒たちの答えは劇的だ。

五十人のクラスで、四十人近くが、「読みは主観的なものだ。」の方に手をあげる。「客観的なものだ。」に手をあげる生徒は、わずかに三、四名にすぎない。つまり多くの生徒が、文学作品を読むときには、人それぞれの解釈があってよいはずだと思っているのだ。

そこで、次のように語りかける。

「なぜ、みんなが国語があまり好きでないのかという理由がこれではっきりわかった。みんなの多くは、読みは主観的なものだと思っている。ところが、試験の点数は客観的なものだ。八十点の答案は六十点の答案より二十点だけ点がよいというのは客観的事実だ。

そこでみんなは漠然とこう感じる。主観的な読みを客観的な試験によって評価するのはおかしいのではないか。国語の試験というのはインチキじゃないのか。国語の授業もインチキください。」

このように語りかけると、多くの生徒が深くうなずく。「こんな疑問を感じたことのある人？」と聞くと、たくさんの手があがる。そこで次のように続ける。

「この問題に、先生なりに答えを出しておきたい。先生は、こう考えています。読みには二つの読みがある。主観的な読みと客観的な読みです。

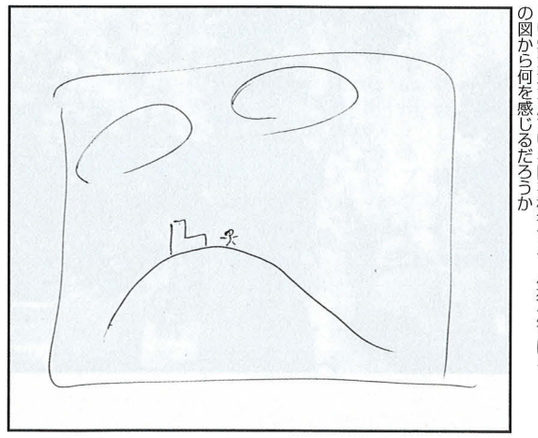
どちらかの読みが正しくて、どちらかが間違っているのではない。両方の読み方がある。先生は、そう考えています。

そして、主観的な読みにも、客観的な読みにも、どちらにもそれぞれの価値がある。でも、試験に出題されるのは、客観的読みの方だけです。例をあげて説明しよう。」

ここで、以下の板書をする。

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ

中学生には「小諸」「古城」「遊子」といった言葉がわかりづらい。その意味をまず教える。



小諸の小高い丘の上にある古城に佇む遊子、空には白い雲が浮かんでいる図を板書する。生徒たちはこの図から何を感じるだろうか

「『小諸（こもろ）』は、信州の小さな町です。『古城』は古い城。戦国時代に築かれた山城の跡が小諸には今も残っています。これは村上氏の城だったものですが、武田氏に滅ぼされたもので、千曲川を見下ろす小高い丘の上にあります。『遊子』とは旅人のことです。」

ここから読みの授業にはいる。Tは私、Pは生徒である。

T「雲白く…とあるけれど、どうして雲は白いんだろう？」P「空が晴れているから。」

T「空は何色？」P「青。」P「スカイブルー。」

T「白い雲と青い空。くっきりした対比が目に浮かぶね。ところがよく考えると、このフレーズには、なぞがある。空が晴れて、青い空に白い雲が浮かんでいるのを見ると、ふつう人はどんな気持ちになるだろう？」P「晴れ晴れとした気持ち。」

P「さわやか。」P「いい気持ち。」

T「そうだよね。ところが、遊子は悲しんでいる。

これは不思議だ。なぜ遊子は悲しんでいるのですか。その理由を短い物語にしてください。ヒントは『古城』です。」

この課題に生徒たちは意欲的に取り組む。短い時間で様々な物語が創作される。そのうちの一つを取り上げて全体に紹介する。

「たとえば、こんな意見がありました。

実は遊子は、昔この城に仕える武将だった。でも、敵に寝返り、深夜ひそかに城門を開いた。そのため武田の兵が一気になだれ込み、城は陥落した。彼は、恩賞をもらえるものと期待したけれど、戦国の世の現実は甘くない。口封じのため、逆に武田から命をねらわれることになった。命からがら逃げのびた彼は、以来自分の行った行為を深く恥じ、諸国さすらいの旅に出た。そして歳月は流れた。

今彼は、何十年ぶりかで、かつて自分が立てこもっていたあの城の跡に立っている。彼の気持ちをよそに、空は青く晴れわたり、雲は白い。そのとき彼の胸に、鋭い悲しみがつきあげてくる…」

こういう読みを紹介すると、生徒たちからは、笑い声と同時に、「すごい…」という嘆声があがる。私もこの読みを、「素晴らしい想像力だ。」と高く評価する。そして文学作品には、こういう自由な読み方もあるのだということを、はっきりと教える。その上で、次のように語りかける。

「でも、これが入試問題だったらどうだろうか。大学のセンター試験に、この詩が出題されたとする。そして、『遊子が悲しんでいる理由を答えよ。』という問題が出されたとする。正解はさきほどの物語。それ以外の選択肢は全て×。

すると、大変なことが起こるよ。入試センターには、抗議の電話が殺到してくる。

遊子が、その城に仕える戦国武士だったという根拠はどこにあるのか。彼が味方を裏切って、城門を開いたということは、どこから読み取れるのか。彼が、自分の行いを恥じて、さすらいの旅に出たということは、どうやって証明できるのか。

こんな問題の出題を認めると、国語の入試制度はたちまち崩壊してしまうね。

つまり、主観的な読みは試験には出題できないんだ。理由は、客観的で公平な採点ができないからだ。試験に出題できるのは、誰が読んでもそうなるという客観的な読みだけだ。授業で教えたり訓練したりできるのも、客観的な読みの方だよ。」

この説明は、生徒たちに一定の説得力を持っている。しかし、「国語には正解がない。」ということにロマンを感じている一部の生徒たちにはいたく失望を与えることになる。そこで、次のように続ける。

「でも、客観的な読みってつまらない読みじゃない。筋道を立てて作品を読み解いてゆくプロセスには、推理小説を読むようなスリルがある。さっきの詩を客観的に読んでみよう。」

T「古城とは古い城だ。でも、城ははじめっから古かったわけじゃない。最初は、ぴかぴかの新しい城だった。それが、どうして古くなったのだろう？」P「…時が流れたから。」

T「そうだね。長い長い時が流れたんだ。人間のつくったものは、はかない。時間の中で必ず滅んでゆく。ところが、滅ばないものがある。

この城が新城だったときも、空は晴れわたり、雲は白く輝いていた。空も雲も、あのときのままだ。永遠な自然と、はかない人間のいとなみ。その対比が遊子の心に悲しみを呼び起こす。

対比されているのは、それだけじゃない。遊子の見上げる空の高さ、広さ、空の青さ、雲の白さ。広大な自然と、古城址にぽつんと一人立ちつくしている遊子の小ささ。この対比もまた、遊子の胸に悲哀を呼び起こす。

…というような読み。こういう読みを客観的な読みと言います。これは、筋道を立てて読んでゆくと、誰が読んでも同じ読みに到達できる読みです。でも、けっして平板じゃないでしょう。スリリングな読みです。」

「主観的読み」と「客観的読み」。両者を明確に区別した上で、それぞれを位置づけてやること。それが、生徒達の国語不信を解消する上で有効だと私は考えている。

（ひろいまもる／土佐中学校教諭）

高知のギャラリー⑬

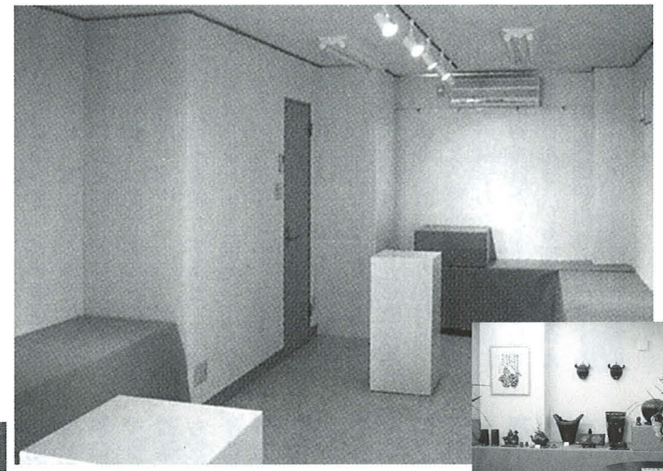
ギャラリー クンスト プラッツ

河合妙子

四年前、升形商店街のひと筋西の通りに小さなビルが建ちました。その一階の二室を貸事務所としてオープンさせました。

不況下のこと、シャッターが閉じたまま一年余。友人の勧めもあって、一室を貸ギャラリーにと方向転換させました。ノウハウなどまったく知らず、ただ、自分が絵を描いていること、またここが私の実家でもあることから、この街を少しでも元気にしたいと思っての出発でした。

小さなギャラリーは知名度もなく鳴かず飛ばずで二年が過ぎる中、今年二月、三月と知人の作家が展覧会をしてくださいました。これが現在のクンストプラッツが生まれるきっかけとなったのです。



せっかくの立地、使い勝手の良い規模。これらを生かし、もっと使っていただくためには…。強力なアドバイス、ノウハウを受けて改装工事を決心しました。

間仕切り壁を取ってフロア全体をギャラリーにし、天井にはスポットライト、ピクチャーレールを取り付け、壁全面をピンの打てるクロス貼りにしました。平面以外の作品に対応するよう展示台も備えました。

街中に気軽にポスターを貼れる場を、との声に、道ゆく人が自由に見られる外のスペースに、ポスターやチラシ、個展案内などいろいろな催しのお知らせに使っていただけるようコルクボードを取り付けました。

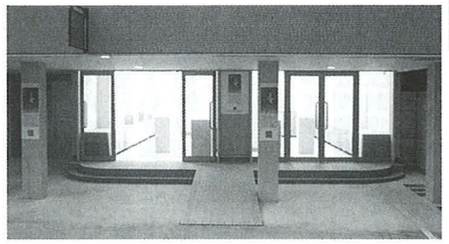
こうして今年五月二十五日、本格的なギャラリーが誕生しました。

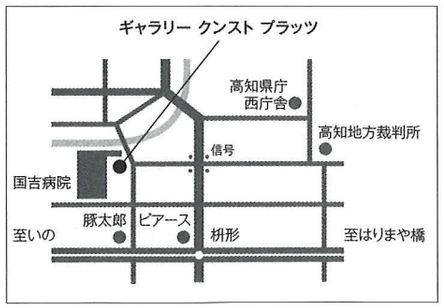
作家の方や足を運んでくださった皆様から、たくさんのご感想やご意見をいただき心から感謝しています。私自身も良い刺激を受け、同時に元気もいただいているような気がします。

街中で地の利があり駐車場（五台）もある。なによりコンパクトでリーズナブルなギャラリーだと自負しています。掲示板もにぎやかになってきました。芸術関連の催しのPRにどうぞご利用ください。

「クンスト」はドイツ語で「芸術」、「プラッツ」は「場」を意味しています。このギャラリーが皆様に愛され、芸術を通して人々が集う場になりますようにと願っています。

（かわいたえこ）





ギャラリー
クンスト プラッツ
高知市上町 1-3-32
電話 088-873-0036（会場）
088-832-2776（お問い合わせ）
定休日／木曜（搬入・展示）

9／18～9／23「和田通博展」
11／20～12／2「川島明展」

高知市文化振興事業団
7月～8月の事業から

月猫えほん音楽会 関連事業
『必見！体験！パントマイム!!』

8月21日（金）
かるぽーと（中央公民館）軽運動室

9月19日（土）の本公演に先立ち、日本屈指のパントマイマー本多愛也氏（本番ではマイム猫役として出演）を招き「必見！体験！パントマイム!!」というワークショップを開催。3年生～6年生までの小学生とその保護者ら約20人が集まり、パントマイムの基本動作を学びました。

「月猫えほん音楽会」は、かるぽーと開館プレ事業として開催し人気を博したプログラムの再演。満月の夜に行われる猫たちの特別な集まり、子どもだけじゃなく大人も楽しめる音楽会です。絵本を満月に映しながら、朗読とジャズピアノの演奏とパントマイムのパフォーマンスをぜ～んぶ一緒に楽しんじゃおうという一風変わった素敵なステージをお届けします。

ワークショップでは、みんなでストレッチをした後、人形になったり透明な壁に沿って動く練習をし、風船を使ったパフォーマンスを共演。小学生の体の柔らかさに本多さんも驚いていました。本多さんは大人も笑ってしまうトークを交えながら展開、最後には、音楽にのってプロのテクニックやマジックを披露し、拍手喝采のうちに終了しました。参加したみんなは9月の本番がよりいっそう楽しみになったようです。

森麻季ソプラノリサイタル
7月21日（火）かるぽーと大ホール

文化振興事業団主催の声楽公演としては2003年の岡本知高さん以来、6年ぶりとなる「森麻季ソプラノリサイタル」を開催しました。

森麻季さんは多数の国際コンクールに入賞し、国内外のオーケストラと共演を重ねる他、オリンピックやメジャーリーグの開幕戦で国歌斉唱を行うなど、日本を代表するオペラ歌手として活躍されています。

今回の高知公演ではオペラの名曲はもちろんのこと、日本の童謡も多数歌われ、詰めかけた多くのお客さんから、大きな拍手があがっていました。

高知を撮る

第25回写真コンテスト入賞作品

昭和のひろめ屋敷（3枚組）

（平成36年8月　高知市）

たどころ　むつみ

「共同参画の波」

風俗歳時記

久しぶりに料理教室に参加した。タイ料理の講習ということで若い女性ばかりかと思ったら、案外男性の参加者もいた。日本では「男子厨房に入らず」と言われてきたが、男性も堂々と料理教室に参加し談笑できるようになってきたことに時代の変遷を感じる。

私が就職活動をしたのは、男女雇用機会均等法ができたばかりの頃。企業に採用要項の請求をしても、返信があったのは男子学生の三分の一に満たず、大学指定校推薦の上場企業には「女子学生はどんなに成績がよくても採用しません」とはっきりNGを出された。無事就職が決まったものの初任給の格差があり、いまだに昇格の性別による違いは歴然としている。経営の意志決定ポジションには全て男性が君臨しているので、女性の入る余地がないのが現状である。

それでも年々緩やかに共同参画の波は押し寄せ、家事や子育てに関わる男性が近ごろは理想の父親像とされる。テレビを見ても、一昔前まで台所用洗剤や洗濯用洗剤などのCMには必ず女性が登場していたのだが、男性が洗濯し同じく男性にその柔らかさを褒めてもらうというシリーズが人気を集めている。家で焼肉を準備するのはお父さんというCMも定着した。

「料理の上手な奥さんをもらおう」とか「男だから泣くな」などと子育てしている親はいないだろうか。親の価値観は次世代に受け継がれる。「男だから、女だから、こうでなくてはならない」という固定観念や役割分担は今も存在するが、その殻をちょんちょんと破ってみるのはいかがだろう。案外、女がやっていたこと男がやっていたことを別の性がやってみると新鮮で楽しかったりもする。

自分らしく生きるために、日常の生活の中で少し共同参画の波にのまれてみるのも面白い。

（立花香）

ポリカワ アート ミーティング

関連イベント

CUL-PORT ARTIST BANK FESTIVAL

かるぽーと アーティストバンクフェスティバル

高知県内の演奏家や舞踊団体、劇団、芸術家などの情報を冊子とホームページにて発信するアーティストバンク。県下の学校や福祉施設など、アーティストの情報を必要とする各施設で利用されています。

このアーティストバンクに登録された方々によるショーケース公演を、かるぽーと大ホールにて行います。

冊子やホームページでは伝わらない、アーティストたちの魅力をお届けします。地元高知のバラエティ豊かなパフォーマンスをお楽しみいただき、あなたのお好みのアーティストを発見してください。

9月27日(日)　11:00〜18:00

会　場：高知市文化プラザ大ホール ロビーほか

入場料：無　料

お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「街の塔」

大野洋平

「自分を表現する」ということは、思っている以上に難しい。

物質主義的な行動、精神主義的な行動、どちらか一つ欠けても成り立たない…。

光を見失ってはいけない。光の色がたとえ変わったとしても、光は常に一つの方向を指している。その光の道を進んでいる時、僕は「自分を表現している」のだろう。

（おおのようへい／画家）

tsuki-neko ehon-ongakukai

月猫えほん音楽会 2009

えほん×ジャズ＝コドモもオトナもめちゃ²楽しいシアターライブ

「月猫えほん音楽会」は、満月の夜に行われる猫たちの特別な集まり。
絵本を月に映しながら、ジャズ・ピアノといっしょに楽しんじゃおうというもの。
"絵本"なんて小っちゃなコドモのためのもんじゃん、なーんて思っていると大まちがい。
いくつになっても絵本は楽しい。
誰かにお話しを読んでもらうのはもっと楽しい。すてきな音楽が入ればもっと楽しい。
さあ、今夜は満月。君も猫になって、「月猫えほん音楽会」へ出かけよう。

高知市文化プラザ 大ホール

9月19日（土）13:00開場　14:00開演

全席自由：一般前売り 2,500円（当日2,800円）　高校生以下前売り 1,500円（当日1,800円）

お問い合わせ：（財）高知市文化振興事業団　088-883-5071

風伯

そういえば あの真珠湾攻撃って…

先日、NHKスペシャル『日本海軍四〇〇時間の証言』というテレビドキュメントを観ていて、わたしは「あっ」と驚かされた。

昭和十六年十二月八日の「真珠湾攻撃」という出来事は誰もが知っている。ところが、いったい誰が、どういう経過で、そのようなことが起こったのかということに、なんの疑問も起こさなかった。そんな自分にいまさらながら呆れている。

「真珠湾攻撃」だけではない。考えてみれば歴史的事実一般に対して、それはなぜ起こったのか、どのようにして起こったのか、と深く考えることもなく生きてきたように思う。そして、これまでの勉強が事実を知ることや憶えることにあって、それがなぜ起こったのかということに、あまりに無関心であった。無関心であっても、それが特別なことではなかったようにも思う。

「歴史的事実」だけでなく、あまりにも明らかな出来事に対して、「なぜ」とか「どうして」とか問うことを憚る風潮もあったように思う。そんなふうに問うことが「屁理屈」とされて鬱陶しがられる空気があったように思う。少し言い訳じみているが、そんな風潮のなかで、芽生え始めた疑問符を言葉に出さず飲み込んでしまっていたようである。

このNHKスペシャルの番組は、そんなことを考えさせてくれ、反省させられた。最近のテレビ番組には少ない、こんな硬派な企画を考えたプロデューサーに、陰ながら声援を送りたい。

（霖）

文化高知 No.151 2009年(平成21年) 9月1日発行 [隔月発行]

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

京ことばで綴る源氏物語

「若紫」の巻

中井和子著『現代京ことば訳 源氏物語』(大修館書店)による

女房語り 山下 智子

プログラム
◆第一部 物語の解説
◆第二部 「若紫」の巻

平安時代の宮廷を舞台に光源氏の恋愛模様を描いた古典文学「源氏物語」。
かつては声良き女房(身分の高い女官)の読む物語りを、
貴人は絵巻を見ながら味わいました。
京都の気候風土が生んだその物語は優美で繊細。
読むほどに様々の表情を見せ、現代に生きる私たちを魅了します。
優美にして柔らかな京ことばで綴られた現代の女房語りで、
雅を生きた殿上人達の息づかい、京の四季の気配を感じ
新しい源氏物語の世界を旅していただけることでしょう。

2009年 10月2日(金)
開場 13:00 開演 13:30

高知市文化プラザ 小ホール

入場料 [全席自由] 前売り:1,500円(当日:2,000円)
※未就学児の入場はお断りします。

高知市文化プラザ かるぽーと

[主催] (財)高知市文化振興事業団
[お問い合わせ] TEL 088-883-5071 http://www.bunkaplaza.or.jp